

の思想、神と人間の能作的合一、流出と還帰など、今日流行の実存哲学以上に現在の興味ある問題を含んでいるといえよう。（紙面の都合上、詳細なことはとどめる）さて、このエックハルト思想を応用、現実化するナチズムのいいかげんさ、反宗教性はさらにキリスト教に対する思想的態度で明らかになってくるであろう。つまり、彼我にとって必要なのは「下僕」としてのイエスではなく「主」としてのイエスとしてのみであり、それはむしろ「最高の意味の自己意識的なる君主的人格」として理解されていた。（遠藤周作の失敗し、批難され、とぼとぼと歩くイエス等は彼我に言わせると「もってのほかか／＼」ということになる。）そして愛は屈従と奴隷道徳以上のものではないとされ、自由と名誉の理念一色に染まった。「自由創造的なる最上の意味における専制的な意思に奉仕することにおいてのみ、愛の理念の新しき評価と新たな転換がなされうる（ローゼンブルク）」と考えたのである。しかし、彼らの唱える自由とは、ただ自らのためにだけ、自らの民族のためにだけ生きる自由であり上、下の志向性によってあらかじめ規定された偏狭なる自由であったのだ。さらに始末の悪いことに、自らに狂信的なヒットラーは彼自身を“運命の人”“ドイツの救世主”と考えていたし、「私、アドルフヒットラーは無謬である」と思い込んでいた。パウロ主義に基づく、ユダヤ的、ローマ的な教会主義の権威に反撥し「それらが権力となったときに、吾人の魂、吾人のヨーロッパ的種族を毒する。彼等に生命であったものは吾人にとっては死である（ibid）」とまで嫌悪し、※注4「心霊的人格の名誉」に基づく「世界的普遍主義」を創り出した。ところが、ナチスにとってプロテスタンティズムかカトリシズムかというキリスト教の歴史的潮流は問題ではなく、ゲルマン的ヨーロッパ人種が維持しえるかどうか最大の問題であった。即ち原始的素質としての「種」に帰結せらるる「民族性そのものの上に立てられたキリスト教であった」のである。その意味で彼我にとってはまさにありがたい「人種的福音教」であった。「魂と血・自我と人種・絶対者と種族とが同一不二の関係におかれる「血」の宗教は、その超越性を民族神話的な歴史的内在性へと転化し、あたかも第三帝国を永久に築きあげたかに見えたが、わずかなチスが誕生してから20年足らずでベルリンにおけるヒットラーとエバ＝ブラウンの自殺によって自己崩

壊に至った。

＊

ナチス精神の中に精神的価値と自然的衝動との混淆を見た南原は、同章後半において日本思想に対して若干ふれている。そこでとりあげられているのは、西田学派の田辺元であるが、そこで田辺元の「社会存在の論理」から「種はひとり自然的生の直接態たるに止まらず、根本において絶対者の『自己疎外』として立てられてあり、而うして『種』の即自的なる直接的統一とこれに否定的に対立する対自態としての『個』とを、否定の否定即ち絶対否定に於て統一綜合する即自且対自的なる『類』※注5的存在が国家である。」という一節をひいている。田辺は自らこの立場を「絶対媒介の論理」と呼んでいるが、西谷によれば「論理を否定する生の非合理性を認め乍ら然もこれを自らの否定的契機として含み、これを更に否定する絶対否定に立って生を止揚的に肯定する立場」である。そうした基本的立場はもちろん、「西田哲学が有限無限相即の具体的立場ではあるが、なおその相即を無限の見地から見る見方が支配的であり、その相即を有限の見地からも見る」（「根元的主体性の哲学」という上からと下からの見方の具体的統一への徹底した田辺の弁証法論理による批判より出発して、彼のそれは、「弁証法とは神秘的 방법에論理的形態をあたえるものだ」という立脚点に基づく神秘的弁証法とすることができるのだが、そこにはおのずからナチスの「種」の論理、理念に共通した核が具現されてくる。

長々と抽象概念がならべられていてわかりにくい田辺が「絶対矛盾の自己同一」と呼んで、「直接飛躍的なる統一」というものによって現実になる種々な矛盾を解決できるとしたのだ。そして田辺が戦時中、追求した専制的国家と個人の自由との調和というものが一つの大きな妥協と絶対無を媒介とすることによる全と個への問題へのすりかえとを本質としてもっていたことは京大で行なった講義を見れば明らかである。つまり、「一君万民・君民一体という言葉が表わしている様に、個人は国家の統一の中で自発的な生命を発揮する様に不可分的に組織され生かされている、国家の統制と個人の自発性とが直接に結合統一されている、之が我が国家の誇るべき特色であり、そういう国家の理念を御体現あらせられるのが天皇であると御解釈申上げてよろしいのではないかと存じます。」（「歴史的現実」）ここでは



矛盾対立する民衆一個と全体者たる権力側との間における本質的解決への指針は天皇制への絶対追従の流れにはかされてなら提起されていない。そこでやや長い南原の問題にしている国家観の一節をひく。「国家はかようなものとして正に類の実現・具体化、類の存在としての『人類的国家』でなければならぬ。それは種の基体的共同性と個の自立性とが否定的に総合せられた媒介存在であり、『基体即ち主体たる存在』としてそれ自ら『絶対社会』又は、『存在の原型』とせられる。その然る所以は、国家が『全個相即的対立的統一の普遍者』として根本に於て『無』の絶対的普遍性の対自化せられた『絶対の応現的存在』として考えられるに因るのである。かくの如きは一に絶対無の信仰に縁由し、国家と宗教との総合——具体的なる宗教と永遠なる国家との『二にして一』なる結合——は由来その『社会存在論』随って全哲学の根本特徴と謂い得るであろう。」（「国家存在の論理」「社会存在の論理」）ここに至って田辺は「国家こそ其の宗教を成立せしむる根拠」否、それ自ら「地上の神の国」とまで言い、このような国家としての宗教こそは、キリスト教信仰とも仏教的信仰とも違い、およそ一般の宗教的信仰とも相違する「弁証法信仰」であるとする。「具体的には一方に於て古代的『民族宗教』を摂取し、民族国家の種的基体の契機に於て個人の生命の根源性を認めると共に、而も他方に民族宗教の如き単に直接的なる生命の根源を礼拝の対象とするのとは區別せられ、個人の自己否定によって還帰すべき根源としての『絶対無』に結びつく最高の信仰の立場である。それは具体的には『絶対無の現成たる基体即ち主体の媒介存在』として国家に対する弁証法的信仰、『国家信仰』に他ならぬ。」この国家信仰の絶対性の論理に対して南原は、田辺のあげる「類」・「種」・「個」というものは「単に論理的に止揚せらるべき契機以上の存在として、爾かく国家のうちに包摂し得ないものがあるのではないかと提起している。つまり南原は、人間の人格というものは国家の絶対性においてもなお侵すことのできない領域を有しているのを見失ってはいけないと言っている。さらに田辺元による「類」による「種」の絶対的包括の公式に対して、「世界に於ける国家相互の関係は寧ろ民族的種の共同体対立の関係にあり」と見るべきでこの公式が絶対的に現実に成り立つかは疑問で、人類国家において「個人の自立的創造性とそれに基づ

く文化的普遍性を通して、人類的連帯による世界の開放的統一を保障する政治的秩序の原理は何にもとめられるのか？」と問うている。考えてみれば、「種」というものがもし、(田辺)にあって日本民族種を意味するのであれば一体、日本民族というものは、何をもってそう呼んでいるのかという疑問を発することができる。朝鮮や中国大陸から移民、渡行してきた民族との混淆がすでに弥生以前には行われていたはずで、そうした事実をふまえれば、自ら純粋な日本民族種が存続してきたという論想はたやすくくずれる。どれだけ甘く見積っても、田辺哲学の「無の弁証法」は階級闘争の否定によるその場限りの平穩を守るために各階級相互間の友愛を問い、神秘的な全個の統合を帰結としていた点において少なくとも真に、時代に生きえるものとは思えない。

以上から南原が戦時下において、全体主義—天皇制ファシズムを志向する日本帝国主義の絶対主義理念に悪しきナチズムの血の理念のアナロジーを觀、論理的不合理に対して内面的な抵抗を示めしていることを我々はうかがうことができるであろう。

＊

こうした戦時体制下においての南原の態度に現代の我々は何を見るであろうか。天皇制を中心とした日本帝国主義による『忠君愛国』、『報国』、『大和魂』等々の標語としてかけられた「日本精神」なるものは構造的にナチズムの民族純血主義の理念と同じ体質をもっていた。つまり、論理的に「日本精神」とは何かという根本的問いをなすことなしにより日本的気分の中に心酔していったのである。そこでは日本的なるものは、自ら人間の行為、行動の外面に具現、発露してくるものと考えられ、ただただ国のために命を燃し尽すことが、最高の愛国精神を示す明かしであったのだ。だから日本精神を説くにあたって道元や千利休、世阿弥の世界が全く注目されなかったのは当然と言えば当然である。全体主義により思想統制された状況の中で、日本主義への又、ナチズムへの根本的な問いかけが行なえた南原の強さは表現の自由が外面的には保障されている戦争を知らない現在の我々にとっては想像できないものがある。ただ戦争の直接の原体験を通していない私にも言えることは、地道にでもいい、現状のひずみに対する批判精神を自分の中で築いてゆくことのたいせつさである。現在朝鮮では、反共、勝共をその思想的(?)バックボーンにもった朴の情報ファシズムの政権が



暴虐のかぎりを尽している。ロッキード問題においても、日本の自民党、右翼、朴政権、KCIAが裏でどす黒くゆ着している様相を明らかにしてくれたはずである。私が今、一番疑問をもっているのは、大学の先生方がどうしてこうした日本とは無関係ではないよどんだ現状の中であって、政治的良心の表明を明らかにしないのかということである。政治的問題だけが、もちろん人類のかかえている問題ではないし、人間の幸、不幸は色々な契機によっていわば混沌の中で生まれたり消えたりしているものでもある。しかし、今の今、日本人として韓国において取りつつある朴のファッションの行為※注6に対する単に敵愾心を向けるだけに終わらない内発的な反抗を生み出していかねば、私は真に時代に生きえる“ホントウ”のものというものは生まれてこないように思う。

注1) かって中国大陸において中国人の秘密結社の最高顧問をしていた竹谷有一郎氏は兎玉の自伝「風雲」に出てくる兎玉機関が凶暴な匪賊「紅槍会」を帰順させたという事実は真赤なうそで、その当時、当の「紅槍会」は兎玉のいた南京徐州よりもっと北方の山東寄りを根城としており、旧日本軍とは敵対関係になかったと述べている。つまり、兎玉は臆病者で「東光公司」乗っ取り後、軍需物資の横流をして私腹を肥やし、匪賊成敗をでっちあげて、日本国内で“殺人犯”としての悪の勲章で逆ににらみをきかしていたという。

注2) 「ライヒ」(Leich) (国家) 単に Staat (国) という意味ではなく、かってプラトンが「ポリティア」を精神と生命・ロゴスとビオス・理念と存在との完全なる統合と考えたごとく、その「ポリティア」を原型とした新しいドイツ“第三<sup>ライヒ</sup>国家”という形成理念。Ibid によれば「人間はこの『ライヒ』の全体の宇宙秩序の理念から発生する使命の実現に於て、各自の意味と本質とを受け取るべく、いずれもが共同体の成員として、その凡てに同一の存在と生のリズムが脈うつ。それ故に哲学と科学の新しい理念は、人間と世界の新しい形成のための国家的精神の行為として、それが『ライヒ』の理念に基づくところのドイツの生命<sup>レーベン</sup>圏の形成に役立つときに、初めて達成せられ、真に自由となるであろう。」

注3) ダーウインの進化論的生物主義が、概して機械論的な系統的進化の法則概念であるのに対し、この「生物学」的立場は全ての外在化しえる状況を支配する形成原理であるとする。

注4) 特にユダヤ人を中心とする徹底した排外主義シニズムは以下のヒットラー-内閣大衆啓蒙宣伝相ゲッベルス博士(通称“兎博士”)によるスローガンを見ればよくわかる。

ドイツを罵倒する者は我が国を罵倒する者だ。彼に鉄拳を見舞え!

ドイツ人は常に外国人とユダヤ人にまさる!  
確かにユダヤ人も人間だが、それを言うなら蚤も動物!

未来を信ぜよ! それでこそ諸君は勝利者になれる!

注5) 「類」は内的に多数の個を自然的に結合する普遍性であるにとらえている。

注6) 朴政権は厳密な意味で、韓国において民族純血主義とそれに基づく大衆動員、経済危機や伝統的道德価値の危機を前提とした大ブルジョアジーとプロレタリアートの政治的不振からくる小ブルジョアジー、中間者層の勃興は今だ興り得ていない。しかし、その極端なまでに軍事警察国家化した独裁的な圧政は明らかにボナパルチズムの要素を持ち、この政権がさらに大衆的政治体制、「首領」神話を生み出す方向に進めばファシズムとしての性格を現わしてくる要素が多分にある。



# コンピューター人間

佐々木 紘

コンピューターは不思議な機械である。彼女ほど多勢の恋人を持っているものは、他にはあるまい。誰も、初めて彼女に出会った時は、何と融通のきかないバカな奴と思う。次にその性質がわかると、例えば右を向けと命令すると1日中でも右を向いてくれる可愛いやつと思ってくる。そしていつか、彼女のとりこになっている自分を見出す。おかしなもので、そうして出会った最初の彼女が一番かわいくてその後、どんなにすばらしいひとに出会っても、初恋のひとは忘れられないことが多いようである。その後、出会う人の中に、いつもそのひとの面影を追っている。——あの、最初の機械（コンピューター）はこうだった、と——。

そして、一人前にコンピューターが使えるようになると、惚れた弱みと言うか、彼女の言いなりになってしまう。処理すべき問題をコンピューターの制限に合わせてその立場から考えてしまう。処理すべき問題は人間の側にあるのであって、機械は単なる補助の道具にすぎない。問題に対する認識をもち、機械を使うかどうかは副次的なことであって、考えるべきはもとの問題であるということは当り前のことで、取り立てて言う程の事はないかもしれない。しかし、コンピューターに惚れてしまっている人はもとの問題を熟考するよりいかに機械を使うかにとらわれ勝ちである。それはこの機械が実に様々な顔

を見せてくれ、またその顔を見たいという欲望が生じるためであろう。確かに、宇宙開発への利用とか座席予約システムとか、美しい顔を持っている。いかに機械を使うか、どんなふう利用するかという立場も一つのアプローチであろう。が、しかし、それにとらわれて問題の本質を見失わないようにしなければならない。

機械の助けを借りるかどうかということが、コンピューターという機械でなければそんなに大きな問題ではないかもしれない。この機械の大量の情報の処理能力を利用することは、色々な種類の問題解決に無視できないものと考えられる。「量が多いということは、それだけで本質的に異なる問題であるかのように思われる」とは、数理言語学者のダイクストラの言葉であるが、そのような状況は実に様々な場面に現われる。それゆえ、常識としてこの機械の能力を知っておくことは必要であると思われる。少くとも、ダイクストラの言葉を実感される人であれば、納得されると思う。

変に彼女に惚れ込んだり、或は逆にコンピューターは難しいと恐れをなすことは、慎まなければならないと思う。いずれにしても、彼女をよく知り、正当に評価してやって戴きたい、というのが彼女に惚れてしまった私の願いである。

(情報行動基礎研究 教務員)

## 現代科学技術の方向

黒岩 祐治

### 1 <現代科学技術の性格>

私は、この5月23日に広島市矢野町公民館で開かれた「これ以上瀬戸内海の自然を壊すな」広島県民集会に参加しました。その星野芳郎氏の講演の中で、三菱石油水島製油所の鋼鉄製石油タンクの底部に裂け目が生じ、そこから重油が、漁民の生活がかかり、生命の豊庫たるべき瀬戸内海へ大量に流入してしまった、取り返しのつかない事故を解説する下りで、

「現代の技術の奇形的状況」という言葉に恐怖を覚えました。次に演台に立った宮本憲一氏の「戦後の海面埋立事業を調べてきた結論として、埋立てによる利益は、企業がとり、税は国税が中心で地本には、それ程利益はない。むしろ公害をまき散らし、道路整備、港湾整備などは地本の行政負担となり、公共性なしと断定せざるを得ない。埋立て（海田湾の）に反対し、海を守ろうとする側にこそ公共性はある